

「つたえること・つたわるもの」 №190

「踏むがいい」——〈沈黙の声〉。痛さを分つため十字架を背負ったイエス。

健康ジャーナリスト 原山建郎

秋学期（9～10月）の文教大学オープン・ユニバーシティ、5回にわたる講座『遠藤周作の「病い」と「神さま」——母、妻、父、息子——の物語を読む』の狙いは、遠藤周作という小説家の〈自分史〉ハイライト&シャドウをたどりながら、『沈黙』、『深い河 ディープ・リバー』など、重たいテーマのバックグラウンド（成育歴、家族歴など）をさぐる試みである。

10月24日（木）の最終第5回講座『人生の踏絵』、『最後の花時計』、『笑って死にたい』を読む』でとりあげる『人生の踏絵』（遠藤周作著、新潮社、2009年→新潮文庫、2019年）は、1996年の帰天後、それまでの講演（口述）を活字化したものだが、その中から『沈黙』のテーマ（主題）、モチーフ（執筆理由・動機）にかかわる講演録を読んだ。

同書の前書き「人生にも踏絵があるのだから」には、かつて遠藤さんが戦争中から自分が弱いせいで何度も踏絵を踏みながら生きてきて、一時は心臓停止したものの奇跡的に回復した三回目の手術のあと、病床で浮かんだ踏絵のイメージから「自分が江戸時代のキリシタンだったら、間違いなく踏絵を踏んでいた。では、その時、どんな気持ちで踏むのだろうか」と考えるようになり、踏絵を踏んだ人々（転びキリシタン）について調べ始めた、と書かれている。

（引用文の下線、太字表記は原山。以下同じ）

★沈黙の中から呼び起こす

しかし、踏絵を踏んでしまった人、すなわちフェレイラとかキアラ（※ジュゼッペ・キアラ神父＝『沈黙』ではロドリゴ神父）といった人

たちのことはほんのわずかな記録しか残されていません。「臭いものには蓋をしろ」で、教会は布教史上の汚点として残さないし、日本側も日本側で幕府が禁じたキリシタンのことをいつまでも残しているわけがないから、みんな捨ててしまっている。まして、転んで罪に問われなかった人たちの記録など残していない。（中略）

なぜ、こんなに記録がないかと言うと、彼らが汚点だと思われて軽蔑され、見捨てられた人間だからです。けれど、まだフェレイラやキアラはかろうじてある。あのベタツとした脂足の跡を（※紙の）踏絵に残した人たちは、もう死んでから何百年も経ちましたけれども、彼らには何の記録もないのです。彼らは本当に声が無かったのか。歴史が沈黙し、教会が沈黙し、日本も沈黙している彼らに、もう一度生命を与え、彼らの嘆きに声を与え、彼らに言いたかったことを少しでも言わせ、もう一度彼らを歩かせながら彼らの悲しみを考えていくというのは、政治家でも歴史家でもなく、これはやはり小説家の仕事ですよ。

彼らも、殉教した人たちと同じように人間です。そして、平凡な私たちと同じように人間です。私たちは殉教した人々を尊敬しますが、同時に私たちは転んだ人々を軽蔑することはできない。そんな資格はない。（中略）彼らも人間である以上、私は彼らに声を与えたかったです。彼らを沈黙の灰の中から呼び起こしたかった。沈黙の灰をかき集めて、彼らの声を聴きたい。そういう意味で『沈黙』という題をつけました。併せて私は、そういう迫害時代に多くの嘆きがあり、多くの血が流れたにもかかわらず、なぜ神は黙っていたのかという、「神の沈黙」とも重ねたのです。

（『人生の踏絵』・文庫、「人生にも踏絵があるのだから」21～23ページ）

そして、遠藤さんは「なぜ神は黙っているのか」、「踏絵を踏むのは憐憫であって、愛情ではない」という二つの重要な〈問い〉を立てる。一つは、「神の沈黙」への〈問い〉である。

「神の沈黙」についていえば、これは何も切支丹時代だけの問題ではありません。（中略）

私は入院の間、可哀想な子どもを何人も見ました。私も手術をずいぶん受けたけれども、私みたいにロクデナシが痛い目に遭うのはかまわん。かまわんこともないけどもさ、しょうがないと自分でも思いますよ。だけど、隣の部屋で五歳の子どもが私と同じぐらいの大手術を受けて、痛みで泣いているとね……私には、なぜそういうことがこの世の中にあるのかわからない。

なぜ神が黙っているのか、私には非常に苦痛だった。なぜ神はそういう不正に対して黙っているのか。不正というのは、法律とか政治の不正ではなくて、いわば生命の不正に対して黙っているのか。

繰り返しになるけれども、この「神の沈黙」というのが一つ。それと転んだ人間たち、沈黙のまま歴史の中に葬り去られた人間たちに命を与えたいという、その二つの気持から私は題名を決めて、主人公を選び取ったのです。

（『人生の踏絵』・文庫、「人生にも踏絵があるのだから」23～24 ページ）

そして、もう一つは「踏絵を踏むのは憐憫であって、愛情ではない」という〈問い〉である。

★憐憫と愛情は違う

ご存知のように、聖書では、イエスという男がいて、いろんな弟子がついてくるけど、最後は十字架にかけられて死にます。仮にイエスは強

虫としましょう。弟子たちは弱虫です。

イエスの最初の弟子で、まあ弟子のなかでリーダー的存在だったペテロなどは、鶏が鳴く前に三度も「イエスなんか知りません」と言った。イエスの弟子とバレたら、自分も殺されると怯えたからです。このへん、踏絵をつきつけられて「足をかけないと殺すぞ」と脅されて踏んだ江戸時代の日本人と同じでしょ？ ペテロはまだマシな方で、他の連中は蜘蛛の子を散らすように逃げて行きました。

私にとって聖書のいちばん面白いポイントは、こうした弱虫の弟子たちがまた集まってきて、自分が裏切ったイエスという人のことを喋って、教えを広め、結局は迫害されて死んでいく、というところなのです。つまり、弱虫が強虫になっていった。なぜ、そうなれたのか？ そこが気になったので、私は『イエスの生涯』と『キリストの誕生』を書いたんです。（中略）

そうやって〈強虫と弱虫〉という主題を、私は大事に持って、育ててきました。いろいろ見ていくと、強虫というのは確かに強いのですが、他人を傷つけるのです。他人を傷つけても信念を曲げないためならやむをえない、というところがある。その結果、自分が苦しまないでいるかという、すごく苦しんでいる強虫もいる。一方、弱虫は周囲を傷つけないのです。傷つけないから弱いのだ、とも言える。（中略）

長患いの女房がいて、外にも行けず、毎日のように「死にたい」と訴えてくる。夫も、可哀そうで仕方がない。とうとうある日、「殺してくれ」と言った。夫は「元気だしてくれよ」なんて慰めるけど、確かに何のために生きているのかわからないなとも思う。次の日曜日、お祭りのある昼下がり、また「殺してちょうだい」と言われる。マンションの窓の外からは、お祭り

のパレードの音が聞こえてくる。「もう生きていたくないの。お願い」。パレードの明るい音がだんだん近づいてくる。いつもの睡眠薬を十錠飲ませたら、こいつは楽になるんだ。音がますます大きく明るくなる。女房に薬を飲ませた時、パレードが窓の下までやって来る。(中略)

こんな老夫婦がいたとして、妻を殺すというのは憐憫からですよ。しかし愛情ではない。愛情はもっと努力や忍耐を要するものだ。憐憫は逃げようとするのです。今の場合だと、女房の苦痛から逃げるわけ。同じ意味合いで、「踏絵を踏むのは憐憫であって、愛情ではない」と言われるのはわかります。あくまで信念を守り通すほうが本当の愛情で——)

(『人生の踏絵』・文庫、「強虫と弱虫が出会うところ」186～189 ページ)

この〈問い〉は、いささかわかりにくいところがある。やや専門的な資料になるが、Web 検索でヒットした『国文白百合』紀要 44 号に載った、白百合女子大学大学院修士課程時代の太田香織さん(現在は釜山大学客員教授)の論文(論文の PDF は [sk0204408\(10\).pdf](#))である『遠藤周作『沈黙』論：〈有用〉性の観点から』を読んでみた。この論文を参考にしながら、前出の「踏絵を踏むのは憐憫であって、愛情ではない」という重要な問題点について考えてみよう。

長い引用になってしまうが(論文中、『沈黙』からの引用には、※印で新潮文庫の該当ページを表記)、『沈黙』でロドリゴが〈踏絵〉を踏む前と、踏んだ後の大きな変化——〈憐憫〉の情を〈愛〉へ昇華させた——とみる、太田「仮説」は、遠藤さんの意図と必ずしも一致しないかもしれないが、なかなか説得力があるように思う。この論文に書かれている〈有用〉の意味を、ざっくり要約してみると、

——基督教が公認され、人々がそれを欲しているポルトガルでは、基督の教えを説くこと、告解を聞くことができる司祭は、ポルトガルの人々にとって〈有用〉である。しかし、フェレイラ来日当初は禁じられていなかった基督教がその後、幕府の命により禁制となった今、日本にとって〈有用〉でないものになって、〈司祭〉であるフェレイラも〈有用〉でない存在になってしまった。そして、フェレイラの雪辱にやって来た〈司祭〉であるロドリゴもまた、——

踏絵により、〈司祭〉というそれまでの人生を棄て、人々にとって〈有用〉であることすら断念することによって、踏絵後のロドリゴはどのような変化がもたらされたのか。(中略)踏絵前のロドリゴを見ると、Ⅲ章では信徒(※キリシタン)の赤ん坊に洗礼を授けながらも、次のように考えている。

この子もまたいつかはその親や祖父と同じように、この暗い海に面した狭隘な土地で牛馬のように生き、牛馬のように死なねばならぬ。しかし基督は美しいものや善いものために死んだのではない。美しいものや善いものために死ぬことはやさしいのだが、みじめなものや腐敗したものたちのために死ぬのはむづかしいと私はその時はっきりわかりました。

(※『沈黙』・文庫 Ⅲ章 46～47 ページ)

つまり、ロドリゴは〈司祭〉として信徒に洗礼を授け、〈基督〉が〈美しいものや善いものために死んだのではない〉ことを認識しながらも、その信徒に対する視線は、信徒たちを〈みじめなものや腐敗したものたち〉とする。ロドリゴのそのような視線は、何度も転び、そしてロドリゴを裏切ったキチジローに対しては顕著に見られる。キチジローによって捕らえられた

ロドリゴの元に現れ、許しの秘蹟を求めたキチジローに対し、ロドリゴは次のように思う。

垢と汗くさい臭気が漂ってくる。人間のうちで最もうす汚いこんな人間まで基督は探し求められたのだろうか。司祭はふと考えた。悪人にはまた悪人の強さや美しさがある。しかし、このキチジローは悪人にも値しないのだ。襤褸のようにうす汚いのである。

(※『沈黙』・文庫 V章 149 ページ)

〈司祭〉として来日したロドリゴだが、〈基督〉のように〈人間のうちで最もうす汚いこんな人間〉を愛することができなかつたのである。ロドリゴが〈人間のうちで最もうす汚いこんな人間〉を愛することができなかつた原因は何だろうか。VII章で、ロドリゴは信徒たちの殉教と同僚であるガルペの死を目撃した後、次のように考える。

「お前は卑怯者ぞ」牀机から立ちあがって通辞は言った。「パードレの名にも値せぬ」

自分(※ロドリゴ)は信徒たちを救うこともできなかつたし、(※踏絵を拒んで刑死した)ガルペ(※神父)のように、彼等を追って波浪の中に消えていくこともしなかつた。自分はその連中への憐憫にひきずられて、どうしようもなかつた。しかし憐憫は行為ではなかつた。愛でもなかつた。憐憫は情慾と同じように一種の本能にすぎなかつた。そのくらいはもうずっとずっと昔、神学校の固いベンチの上で習ったのに、それは書物の上の知識だけにとどまっていたのだ。

(※『沈黙』・文庫 VII章 174 ページ)

ここでロドリゴが感じた〈憐憫〉とは、優位な立場の者が力の弱い者や不幸な境遇にある者にかける情のことである。基督にならうべきである〈司祭〉ロドリゴは、無意識のうちに信徒たちと自身との間に劣位と優位の隔てを置い

ていたのである。ロドリゴは信徒たちやキチジローと自己との間に自ら上下関係を作ったために、信徒たちを愛することができなかつたのである。

ロドリゴのそうした態度は、踏絵を踏むことによって変化する。踏絵後のロドリゴは、〈うす汚いこんな人間〉であるはずのキチジローに対して、「強い者も弱い者もないのだ。強い者より弱い者が苦しまなかつたと誰が断言できよう」と述べている。ここで使われた〈強い者〉はどんな迫害の中でも信仰を曲げない信徒を指し、〈弱い者〉は踏絵を踏んだキチジローやロドリゴを指すだろう。信仰を曲げない信徒たちや〈司祭〉は教会にとって〈有用〉である。踏絵を踏んだキチジローやロドリゴは教会にとって無用である。つまり、〈強い者〉は教会にとって無用である。しかし踏絵を踏み教会にとって無用になったロドリゴは、無用な存在となることによって初めて〈弱い者〉の苦しみを理解したのである。

(『遠藤周作『沈黙』論：〈有用〉性の観点から』
73～74 ページ)

『沈黙』では最後のほうで、ロドリゴが踏絵を踏むシーンがある。さきに引用した「弟子のなかでリーダー的存在だったペテロなどは、鶏が鳴く前に三度も「イエスなんか知りません」と言った。」ペテロも、ある意味では「イエスなんか知らない」という踏絵を踏んでいる。

「ああ」と司祭は震えた。「痛い」

「ほんの形だけのことだ。形などどうでもいいではないか」通辞は興奮し、せいでいた。

「形だけ踏めばいいことだ」

司祭は足をあげた。足に鈍い重い痛みを感じた。それは形だけのことではなかつた。自分は

今、自分の生涯の中で最も美しいと思ってきたもの、最も聖（きよ）らかと信じたもの、最も人間の理想と夢にみたされたものを踏む。この足の痛み。その時、踏むがいいと銅板のあの人は司祭にむかって言った。踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ。

こうして司祭が踏絵に足をかけた時、朝が来た。鶏が遠くで鳴いた。

（『沈黙』・文庫、Ⅷ章 218～219 ページ）

その昔、私が遠藤番記者になりたてのころ、1963年に『主婦の友』に1年間連載された『わたしが・棄てた・女』を担当した遠藤番記者・関口昇先輩に、『沈黙』だけは読めと言われた。そのとき、ロドリゴが踏絵を踏むⅧ章のシーンまでで、そのあとのⅨ章は読まなかった。

しかし、今回、文教大学のオープン・ユニバーシティ講座の配布資料を作成するために、改めて、そのあとのページを読んだところ、銀貨30枚でイエスを売ったユダ（イスカリオテのユダ）のように、ロドリゴを奉行所に売った、日本版ユダことキチジローが、ある夜、踏絵を踏み、転んだ元司祭、ロドリゴの許を、彼を裏切り、彼を奉行所に売ったキチジローが訪ねてきて、戸口の向こうから告解（罪の許し）を与えてほしいと懇願するシーンが描かれている。

「わしはパードレを売り申した。踏絵にも足かけ申した」キチジローのあの泣くような声が続いて、「この世にはなあ、弱か者と強か者のござります。強か者はどげん責苦にもめげず、ハラソ（※天国）に参れましょうか、俺のように

生まれつき弱か者は踏絵ば踏めよと役人の責苦を受ければ……」

その踏絵に私も足をかけた。あの時、この足は凹んだあの人の顔の上にあった。（中略）その顔は今、踏絵の木の中で摩滅し凹み、哀しそうな眼をしてこちらを向いている。（踏むがいい）と哀しそうな眼差しは私に言った。

（踏むがいい。お前の足は今、痛いだろう。今日まで私の顔を踏んだ人間たちと同じように痛むだろう。だがその足の痛さだけでもう充分だ。私はお前たちのその痛さと苦しみをわかちあう。そのために私はいるのだから）

「主よ。あなたがいつも沈黙しておられるのを恨んでいました」

「私は沈黙していたのではない。一緒に苦しんでいたのに」

「しかし、あなたはユダに去れとおっしゃった。去って、なすことをなせと言われた。ユダはどうなるのですか」

「私はそう言わなかった。今、お前に踏絵を踏むがいいと言っているようにユダにもなすがいいと言ったのだ。お前の足が痛むようにユダの心も痛んだのだから」

その時彼は血と埃でよごれた足をおろした。五本の足指は愛するものの顔の真上を覆った。この烈しい悦びと感情とをキチジローに説明することはできなかった。

「強い者も弱い者もないのだ。強い者より弱い者が苦しまなかったと誰が断言できようか」司祭は戸口にむかって口早に言った。

「この国にはもう、お前の告解をきくパードレがないなら、この私が唱えよう。すべての告解の終りに言う祈りを。……安心して行きなさい」

怒ったキチジローは声を押さえて泣いていたが、やがて体を動かし去っていった。自分は不

遜にも今、聖職者しか与えることのできぬ秘蹟をあの人に与えた。聖職者たちはこの冒瀆の行為を烈しく責めるだろうが、自分は彼等（※自分を責める聖職者たち）を裏切ってもあの人を裏切っていない。今までとはもっと違った形であの人を愛している。私とその愛を知るためには、今日までのすべてが必要だったのだ。たとえばあの方は沈黙していたとしても、私の今日までの人生があの人について語っていた。

（『沈黙』・文庫、IX章 239～241 ページ）

再び、この論文の後半を読んでみる。

では、ロドリゴに踏絵を踏ませ、〈司祭〉としてのそれまでを棄て、人々にとって〈有用〉であることへの断念へと導いたものは、一体何だろうか。それは、ロドリゴの〈基督〉に対する〈愛〉である。ロドリゴは、自ら踏んだ踏絵の中の〈基督〉の顔について次のように回想している。

それは今日まで司祭がポルトガルやローマ、ゴア（※当時はポルトガルの植民地）や澳門（※マカオ：当時はポルトガルの植民地）で幾百回となく眺めてきた基督の顔とは全くちがっていた。それは威厳と誇りをもった基督の顔ではなかった。美しく苦痛をたえしのぶ顔でもなかった。誘惑をはねつけ、強い意志の力をみなぎらせた顔ではなかった。彼の足もとのあの方の顔は、痩せこけ疲れ果てていた。

（※『沈黙』・文庫 IX章 223～224 ページ）

ロドリゴは踏絵によって〈司祭〉としてのそれまでを棄て、全てを失った。加えて、（※棄教したあと、岡田三右衛門の名を与えられた）ロドリゴは切支丹屋敷役人日記（※『沈黙』の最終ページに収載）の中で、〈不食致し相煩ひに付き（※この後、牢医石尾道的、薬用ひ申し候へ

ども、段々気色さし重り、昨廿五日昼七時半過ぎ、相果て申し候、右三右衛門、六拾四歳に罷りなり候、此の外、相替わる儀御座なく候、以上、と続く）〉死んでいる。その死は、例えばかつて来日した宣教師たちのような輝かしいものではなかったと考えられる。〈司祭〉としての〈有用性〉、人生、全てを失い、みじめに死んでいくことで〈痩せこけ疲れ果てていた〉、しかし〈人間のうちで最もうす汚いこんな人間〉さえも愛した〈基督〉にならおうとしたのである。

（『遠藤周作『沈黙』論：〈有用〉性の観点から』 74～75 ページ）

そして、もう一つ、ロドリゴに踏絵を踏むことを勧めたフェレイラ（日本名・沢野忠庵）の言葉が、『沈黙』という小説における、重要な「伏線」となっていたのである。

〈基督〉にならうため、〈司祭〉という立場を棄て、誰にも〈有用〉とされない人生を歩むという行為は決して容易ではない。実際にフェレイラは（※日本の）人々に〈有用〉であることを棄てられなかった。その行為は、〈基督〉への〈愛〉によって成立したものに他ならない。よって、フェレイラが棄教前にロドリゴにかけた「お前は今まで誰もしなかった最も大きな〈愛〉の行為をやるのだから……」という言葉における、最も大きな〈愛〉とは〈基督〉にならうことで示される、ロドリゴの基督への〈愛〉を指しているのである。

（『遠藤周作『沈黙』論：〈有用〉性の観点から』 75 ページ）

遠藤さんが『白い人』で第33回芥川賞を受賞したのは、1955年7月、33歳のときでした。

その当時はキリスト教の人で小説を書くという人がいなかった。(中略)

特に僕らの世代の作家というと、いわゆる第三の新人だから、観念的なことを非常に嫌って、日常生活の中で自分の考えを歯で噛み砕いたものでなければ信用しない。そうするとキリスト教のようなものは日本人にとって非常に観念的なものですからそれが歯で噛み砕かれているかどうか。つまりそれはそういうものが日本に土着するかという大問題にもなってきます。今ももちろんだが滑り出しもうまくいかなかったわけで、僕は自分の今までの仕事を第一期と呼んでいるんですけど、その暗中模索時代というのが、その第一期の中の初期の作品群だと思います。例えば「白い人」とか「黄色い人」ですね。

(「新たな決意」50・12)

(中略) 私はカトリックでしたから、もの心、つきはじめてから、神の問題ばかりに、イジめられてきました。外国の文学を学ぶ年齢になってからも、神の伝統が長いことあった白い人の世界と、神があってもなくても、どうしてもよかったこの黄色い世界との間にたえず引き裂かれました。この事は仏蘭西に行ってますます強くなりました。

昨年の終りになって私は小説を書きはじめました。作品(「白い人」)の第一行にジャック・モンジュという外国人の名を書きつけました。すると、この名の背後に神と悪魔、善と悪、肉体と霊、それらすべての血なまぐさい戦いを描けるような気がしました。けれども私はジャックではない。白人ではない。黄色い日本人であります。それ故私は再び、日本人の名をそこに書きました。すると、突然その黄ばんだ顔には劇(ドラマ)がなくなってしまったのです。作家として私はこの点に非常に苦しみました。

「白い人」を書いた後、私はやがて、「黄色い

人」を書く義務を感じます。神のない世界には劇(ドラマ)がないという苦しみがあります。この苦しみを、あの神と人間との闘いを描いた欧州の小説までに対抗させることは、作家としての私の夢であります。

(「感想——芥川賞受賞のことば」30・7)

(『遠藤周作による遠藤周作——試みの自画像』「1955 32歳」94~94ページ)

そして、心ならずも踏絵を踏んだロドリゴに、〈沈黙の声〉は、「踏むがいい」と言った。
——『私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ』というイエスのことばとして聞いた(沈黙の声)を、日本にやってきた「白い人」である宣教師(司祭)の視点ではなく、日本の転びキリシタン・「黄色い人」のつらく苦しい人生を通して、「苦しみの連帯」としてのドラマを描こうとした遠藤さんの思い——

遠藤さんが、かつて最愛の母・郁さんに言われた「ホーリーであれ」という言葉は、「自分ひとりだけが聖(きよ)くあれ」という意味ではない。「ホーリーであれ」という言葉は、弱き者、病む者、孤独や不安で人生に越望している者への「苦しみの共感・連帯」を指している。

遠藤さんが生きようとした「ホーリー」な思いが、いま、私の心の中で強く響いている。